

古代日本の神判に就いて（其五）

（迦具土神誕生神話の一考察）

白 鳥 清

火を適用した神判思想の反映らしく思はるゝ類例を、神代史の説話の中に求めて、順次研究し論述して来た自分は、更にいま火ノ迦具土神誕生の物語に就いても、物語の構成されてゐる内容の中に、火神判思想の影響を認めてゐるのであるから、茲に一應の考察を試み、以て從來發表して来た「火を適用した神判思想の反映」の一節だけを終りたいと思ふ。

神代史によれば、伊邪那岐、伊邪那美の二神は、國土大八島を産み給ふてから、次ぎ次ぎに、風の神、木の神、山の神、野の神等々の諸神をお産みになられたのであつたが、いや最後に、火神火之迦具土神をお産みになられて、悲しくも病み臥すお身となられ給ひ、遂に神遊り坐したのであつた。此の條の物語を、古事記には、

既に國を生み終へて、更に神を生みましき。……次に生みませる神の名は、鳥之石楠船神、亦の名は天鳥船神と申す、次に大宜都比賣神を生みまし、次に火之夜藝速男神を生みましき。亦の名は火之炫毘古神と謂し、亦之名は火之迦具土神と謂す。此の子を生みましに因り、美蕃登

炙えて病み臥せり、故伊邪那美神は、火の神を生みませるに因りて、遂に神遊り坐し、
と記してあるが、更に日本書紀の文面で之を見ると、四神出生の章の第二ノ一書には、

日、月、既に生れたまひぬ。次に蛭兒を生む、此の兒、年三歳に満りぬれども脚尙ほ立たず。初め伊弉諾尊、伊弉冊尊、柱を巡り給ひし時、陰神先づ發言す、既に陰陽の理に違へり。この所以に、今蛭兒を生む。次に素戔鳴尊を生む。此の神、性、惡くして常に哭き悲くことを好み、國の民、多に死に、青山を枯になす、故れ其の父母、勅して曰く、假使、汝この國を治ば、必ず残ひ傷る所多からむ。故れ汝は極めて遠き根國を馭す可しと。次に鳥磐櫛樟船を生む。輒ち此の船を以て蛭兒を載せて、流の順に放ち棄つ。次に火神軻遇突智を生む。時に伊弉冊尊、軻遇突智に焦れて終りましぬ。

とあり、第三ノ一書には、

伊弉冊尊、火産靈を生む時、子の爲めに焦れて神退ましぬ。

とあり、第四ノ一書には、

伊弉冊尊、火神軻遇突智を生む時、悶熱ひ懊惱む、因りて吐す。

とあり、第五ノ一書には、

伊弉冊尊、火神を生み給ふ時に、灼れて神退ましぬ。故れ紀伊國の熊野の有馬村に葬しまつる。

とあり、第六ノ一書には、

然して後に、悉く萬の物を生み給ふ。火神軻遇突智の生るゝに至りて、其の母伊弉册尊、焦れて、化去カムサリましぬ。

とある。⁽²⁾

これ等が記紀に見える火神迦具土神誕生の記事の凡てである。

以下記紀に載せてある是等の物語を、精細に討検して見よう。

先づ女神伊邪那美の御神は、大八島國を生み、また諸々の神々をも産みになられ給ふたが、未だ御疲勞の御様子もなく、いとも御壯健にましましたが、終りに、火之迦具土神を御産みになられて、美蕃登、炙えて病み臥し、遂に神避り坐したといふのであるのを見ると、此の物語の中では、大八島國を初めとして、萬物の起源を、當時の日本人は、産むといふ思想で説明して居ることが推察される。それ故に之れは、舊約聖書に見える創世紀の物語に類するものであることが考へらるゝのである。併し同じく創世紀の物語であるとは云へ、舊約聖書のそれと、日本神代史のそれとは、自然に趣を異にして居り、日本の神代史のは萬物を創造するに産むといふ行爲を以てし、世界の創世紀神話の物語の中に、特殊の地位を保つてゐると見らるゝのである。而して日本の創世神話では、伊邪那岐、伊邪那美二神が、創造神として考へられてゐるのであるから、其處に火神迦具土神を

産みになられたといふことは、火の CREATION 神話に關係してゐる物語であることが想像される。それで、國土及び山野などの存在が、女神が産み給ふたといふ出産現象によつて、Create されたと叙述されてゐる如くに、火もまた女神が産むといふ行爲によつて、Create したといふ物語になつてゐるのである。

それならば、實際上女神が火を産み給ふことが、可能事であるかといへば、勿論普通人として考察するならば、不可能事であり、不合理であることは明らかなことであるが、物語が神話であり、創造主は神であるといふ觀點から、神は吾々凡人には想像もつかないことでも、爲すことが出来るのであるから、従つて常人には産み得ざるものをも、神には産み得らるゝのであると、斯様に、宗教的若しくは信仰的想念のもとに、判斷を下して神話を解釋する程單純な人があつたとしたならば、なるほど女神が火神を生み給ふ現象に對しても、別に不可思議とも考へなからうし、不合理とも、不可能事とも思はないであらうが、かゝる解釋では現代的研究的態度を抱持する人々に承服を與へることが出来ないであらう。

それ故に吾々は神話を研究するに當つて、當時の人々が火の起源に關して如何なる觀念を抱懷してゐたか、萬物の現存してゐる有様を、如何に説明してゐたかに對して、縱し今日進歩して居る人々の判斷からすれば、それが幼稚な考察であつたとは言へ、古代人の心理状態では、それが最も合

理的な説明、科學的な解釋であつたのであるから、神話研究の方法としては、神話を出來るだけ、古代人の心理状態に還元して見る方法を探らなければならぬと思ふ。だから女神が火神を産むだといふことに對しても、神は何事をもなし得らるゝのであるから、火神をも産み得たのであるといふ説明だけでは満足出來ないのであるし、古代日本人の心理状態に神話を還元してゐるとは考へられないのである。何となれば、火を産むといふことは、現代人でも古代人でも、實際的には爲し得られないと考へてゐたことは共通的心理であるからである。

それで自分は、此の迦具土神話の物語に於いては、古代日本人が實際如何なる方法によつて、發火せしめてゐたかを示されて居り、其の方法として、*fire drill* を使用してゐたらうといふ推定がなされると思ふ。此の *fire drill* と、男女の生殖問題とを結び付けて、火の起源を説明をして居る例は、多くの未開民族間の説話に見出されるのであるから、⁽¹⁾ 古代日本人もまた、此の兩者を相互に關聯せしめて居つたので、それが此の迦具土神話の物語に混在してゐる要素の一つであると、考察を下しても誤りはなからうと思ふ。併しその論は何れ稿を改めて叙述することゝして、兎に角此の物語では、古代日本人が火を何によつて發火せしめたかを説明して居ることゝ、それが女神の玉體より産まれ給ふたとなつてゐるので、火が、人間生活上の重要問題の一つである出産に關係してゐたらうといふことも考慮しなければならぬ。*fire drill* と男女の生殖とを結び付けて居る神話は、

火の起源を説明して居る一種の神話であるが、火と出産とが結合されてゐる神話、即ち出産時に火を適用して一種の Ceremony をなすといふ神話と、火の起源を説明する神話とは別なものであることを知らなければならぬ。自分は、迦具土神話には此の二種の elements が混合して居ると思つてゐる。

扱て、此の迦具土神話には、*fire drill* と生殖とを關聯せしめて、火の起源を説明して居る古代人の思想が伏在して居ると思はれるが、而も猶ほ不可思議に感ぜらるゝのは、女神が生むといふ現象によつて、森羅萬象を創成される神であらせらるゝならば、大八島國を生み、更に風の神や、山の神や、野の神等々の諸神をお産みになられた時と同様に、火の神をお生みになられても、何等玉體に御變化あるべき筈なく、況んや神避り給ふことなどなかるべきに、物語の筋道はそれとは反對に、火の神誕生と共に、女神は病み臥し、遂に神避り坐して居られるのである。不可思議に感ぜらるゝと言つたのは此の點で、そこに何等か思想的に深い理由が伏在して居るのではなからうか、古代人が火を出産に關係せしむるのには何か外に異れる觀念が包含されてゐるのではなからうか。

そこで、上に叙述して來た「火の神」の別名の文字に就いて之れを觀察すると、日本書紀では「火神軻遇突智」と書き、また、「火産靈」とも記して居り、古事記では、「火之夜藝速男神」とも、「火之炫毘古神」とも、「火之迦具土神」とも書いて居るのであり、何れも頭に「火神」とか「火」とかの

字を附して居るので、それが fine に關係して居る神であることは、何人にも承服されることと思ふが、更に其の字義の説明として、古人の説を引用するならば、宣長大人は此の神名の意義を解いて古事記傳の「火之夜藝速男神」の條に、「夜ノ字は迦の誤ならむか、亦ノ名の炫、迦具など、同じ類なるべければなり」と言つて居り、また「火之炫毘古神」の條には、炫は迦賀と訓べし、靈異記に炫を迦々也計利と訓り、字書には、耀光也とも、火光也とも、明也とも註せり」と言ひ、更に「火之迦具土神」の條には、⁽⁵⁾迦具は赫といふ意、其は迦賀とも、迦藝とも、迦具とも、迦宜とも活て同じ言なり」と言つて居るのである。それ故これを宣長の註釋によつて判斷すれば、此の火神は、火が光り輝くといふ意味の語原を有つてゐるものと考へて差し支へはなさうである。

併し此の解釋に對して少しく疑問と思はるゝのは、耀光とか、赫とか、加々也計利とか、迦宜とか、迦藝とかいふ類似語より、迦具土神の迦具の意義を解く時には、火の光り輝くとか、火の影とかいふ fine の外形上にのみ重心を置いて解釋して居るやうに思はるゝ點である。火は陽的なものであり、日と對比されるものであるので、加々也計利とか、赫とかいふ風に形容されることは、最も自然ではあるが、一方また火には凡ての物を焼き盡すといふ本質的な性質のあることを没却してはならないのである。日本神話で太陽神である天照大神が、照り輝く神であらせらるゝが、それが女神であるのは、光り輝くのは火と同じであるが、凡ての物を焼き盡すといふ怖ろしい性質がなく、

現はれる處では、決して女神の姿をとつてゐない。例へば此の迦具土神話に於いても、「火之夜藝速男神」と言ひ、「火之炫毘古神」と稱して居つて、男も毘古も、男子の敬稱であるから、此の神が男神であつた證據である。また木花佐久夜毘賣物語に毘賣の御子として生れさせる火照命も、火須勢理命も、火遠理命も、何れも火神であるが、男神であらせられるし、垂仁天皇の御子、本牟知和氣命が、名義よりすれば火神であらせらるゝが、これまた男神である。

それ故に迦具土神は、火神であり而も男神である點から見れば決して光り輝くといふ外形的なものに因んで命名されてゐるのではなく、凡てのものを焼き盡すといふ怖れられてゐる火の本質に因んで、男神である火神に命名されたのではなからうかと思ふ。さすれば、迦具土神の迦具の原義は寧ろ「焦げる」(Kogeru)、「焦がす」(Kogasu)、「焦がれる」(Kogareru)などいふ語と類を同じくするのであらう。而して其の根元は、勿論輝く (Kagayaku) とか、炫けり (Kagayakeru) などいふ語の kaga と、焦げる (Kogeru) の koge とは、同一語根であつたのが、漸次時を経過するに従つて分化し、一は光り輝くといふ如き火の外形に重きを置いた語のやうに使用され、一は焼き焦すといふ如き火の本質の作用に重きを置いてゐる語のやうに使用されるに至つたのであらう。

それで此の迦具土神の名義は、火の焼き盡す性質に重きを置いて附けられたと思はるゝのは、現

に産みの女神である伊邪那美神を、焼き焦して遂に神避り給はしめて居るのであるに依つても證明されるが、また迦具土神を一名火之夜藝速男神と稱して居ることに依つても分る。現代日本語で、火で焼くのを焼く（Yaku）と云ふ語で表現して居るが、一方また焦げる（Kogaru）と云ふ語が焼くと同意味に用ひられてゐる。自分は古代日本の社會に於いてもまた、焦ぐ（Kogu）と焼く（Yaku）が語原は異なるが、併し同一な意義を有してゐたのであらうと思ふ。さすれば火之夜藝速男神と、火之迦具土神とは、名前は異なつてゐるが、夜藝（Yagi）は焼（Yaku）と同一語であり、迦具（Kagu）は焦ぐ（Kogu）と同一語であると考へられる。宣長大人は夜藝を迦藝の誤りであらうと言はれた。併しまた、若し夜藝の語を活すならば、夜藝は焼の意なる可しと言はれてゐるが、自分は迦具土神の別名が火産靈とも、火之炫毘古とも言はれてゐるのであるから、火之夜藝速男神もまた其のまゝ別名と見るのである。それで火之夜藝速男神の夜藝が焼くといふ火の本質的な處より來て居るとすれば、其の別名なる火之迦具土神の迦具は、焦すといふ火の本質的な點から附けられた御名であらうと考へる。

火之迦具土神の名義は、焼くとか、焦すとかいふ火の本質に因んで、命名したのであらうといふ自分の見解は上の説明で了解されたと思ふが、書紀の本文に「焦れて化去ましぬ」とある點を如何に見るべきか、此の點にも物語の内容からすれば、火と出産とに關して心理的の説明を必要とするのであらう。

宣長大人は、古事記傳の「見爰」の條で、「見爰は夜迦延と訓ぞ古言なる、凡て被爰被爰などの類の禮と流とは、古は延と云ひ由と云り」と述べて居るのみで、加具の名義の解釋の條でも、見爰の解釋の條でも、單に字句の説明をなして居るに過ぎなく、火神を産み給ふて、焦れて神避りましとといふ内容的の敘述や、心理解剖をなして居らないのである。即ち神話作者の心理過程はどうであつたかの説明には及んで居らないのである。

此の點に關しては、單簡に一般人は火神を生んだのであるから、當然焦かれて死に至つたのであると言ふかも知れないし、また火神を生んで死に至つたといふことは、現代社會に於いて見らるゝ、普通人の難産の事實が神話化されてゐるのであるといふかも知れないが、神話に取り扱はれてゐる如く、女神は萬象を生み給ふ創造神であつて、既に大八島や、山の神、風の神、野の神など常人には産むことを得ないものを産み給ふて、母體は安泰であらせられたのであるから、火の神を産み給ふたとしても、左程に容易に病み臥し、神避るべき筈はないと思はれる。それ故に自分は先きに火神を生んで神避り給ふたといふ神話は不可思議な神話であると言つたのであつて、此點に就いては宣長大人も未だ説を爲してゐないのである。

次に、飯田武郷氏は火神生出物語に就いて、それを如何に解釋してゐるかを見ると、書紀通釋

に、

火神を生る事は、天地の初より、日月已に在て、日神月神は後に成坐て、主宰玉ふと同じ心なるものから、此神を生玉ひて、被炙玉へるとおもへば、御體は火炎を放ちて生坐しなるべし。

火産靈とも申し奉れるも、然る由にぞ坐しけらし。

と言つて居る。⁽⁸⁾

此の武郷氏の註解を一見したわけでは、勿論其處に、出産時に火の *on heat* をなしたとか、父親に承認せしむる儀式即ち *father's recognition* の思想が伏在して居るなど、考察して居る形跡は少しも認められないが、たゞ併し、「此神を生玉ひて、被炙玉へるを思へば、御體は火炎を放ちて生坐しなるべし」と推考して居るのから、之れを忖度すれば、此の物語に於いて、古代日本人の産時の風習に、火炎を適用して居る如く解釋し、神話傳説の内容に伏在する心理に説明を加へて居るのは、飯田氏の卓見と稱さなければならぬ。

そこで更に、此の火神誕生の結果女神の神避り給ふたといふことに關聯して、神代史の中で、神々の誕生物語の記述が他にあるかどうかと言へば、必ずしも其の例に乏しくはないのであるから、迦具土神誕生の物語を解く爲めに、其の例を示すならば、先づ第一に、御子誕生の結果、其の御子が男子であつたか、女子であつたかといふ、現象の差異に依つて、生母神の行爲の善惡良否を、審

判せんとする思想が、表はされてゐる物語のあるに氣付くであらう。

いま日本書紀の瑞珠盟約の章を見るに、天照大神は、素戔鳴尊の天に昇り來ます時に、勃然に驚き給ひて、「素より素戔鳴尊の暴く惡きことを知しめせば、「吾が弟尊の來ること、豈に善き意を以てせんや、謂ふに國を奪はむとする志ありてか。それ父母既に諸子に任せたまひて、各々その境を有たしむ。如何にぞ就くべき國を棄て置きて、敢て此の處を窺窺ふ乎」と弟尊の態度に對して、深く御疑惑を抱き給ふたのであつた。其時素戔鳴尊は、「吾は元より黒き心無し、但だ父母の尊の已に嚴しき勅ます、將に永るに根國に就りなむとす、姉尊と相見えずは、吾、何にぞ能く敢て去らむ、是を以て雲霧を跋み涉り、遠くより來つ、意はず、阿姉、翻りて起嚴顔むといふことを」と辨明なされてゐる。其時再び天照大神は、「若し然らば、特に何を以て爾が赤き心を明さむとする」と尋問されてゐる。素戔鳴等はそれに對へて、「請ふ姉と共に誓はむ、夫れ誓約の中に必ず當に子を生むべし、如し吾が生めらむ、是れ女ならば、則ち濁き心ありと以爲せ、若し是れ男ならば、即ち清き心ありと以爲せ」と言つて居る。⁽⁹⁾

扱て此の天神と素神の盟約の物語には、火といふ元素が齎されてはゐないが、神々を生むといふ記載はあるのである。而して此の誕生の物語では、如何なることが前提として示されてゐるかと言へば、天照大神が、素神の昇天に對して國土を奪ひ給はんとする志ありといふ御疑念を抱き、強く

之れを詰り給ふたのに對して、素神はまた堅く之れを御否定なされたので、其の結果何れが是であり、何れが非であるかを決定せんとして、互に御子を生むといふことをなされてゐるのである。而して、其の御子が男子であるか、女子であるかによつて、行爲の清濁正邪を決定せんとして居るのである。即ち The accused の地位に立つた素神は、それによつて抱かれたる疑惑を晴さんとし、The accuser の地位に立つた天神は、それによつて、御自身の主張の善良なることを、確保せんとして居るのであることは明らかである。

神代史に見える此の天神素神の盟約の物語の内容の討檢に就いては、寡見にして、從來研究されたものあるを聞かないし、また従つて卓説あるを知らないが、兎に角、此の物語では、女神のみでなく、男神もまた御子を産むといふ叙述であつて、普通には考へ及ばない記載であるから、頗る解釋に困難な物語と觀じられる。

自分は此の物語は、恐らく、世界にも類のないもので、古代日本人間に行はれてゐた獨特な神判（ordcal）の一形態と考へてゐるのである。即ち互に誓約（oath）をなし、御子を産み、男子が生るか、女子が生るか依つて、其の母親の行爲に adultery の有無を判定せんとした、古代に行はれた慣習の一つであると思つてゐる。換言すれば、日本の古代社會に貞操神判といふ風習が行はれてゐて、其の名残りが、遇々天神素尊盟約の物語中に、遺存して居ると見て差し支へがないと思

つてゐる。それ故に、此の物語中には、出産と火との關係は叙述されてゐるが、出産と ordcal との關係は明記されてゐる。

而してまた天神と素尊との盟約の此の物語以外に、御子出生の物語と、火といふ元素とを結合せしめて、興味ある物語として構成されてゐるものがある。例へば既に先きに、自分は古代日本の社會で、一般に善惡正邪の判定に、火を適用して ordcal をなした風習の存してゐたことを述べたことがあるが、此の一般的に Fire ordcal の存してゐたと推察される記録以外に、爾々藝命と木花佐久夜毘賣の物語には、矢張りそこに火を適用して爲されたる貞操神判の例が見出されるのである。則ち木花之佐久夜毘賣の御懷妊に對して、天孫爾々藝命が、古事記に記してある如く、「佐久夜毘賣一宿にや妊める、是は我が子に非ず、必ず國神の子にこそあらめ」と、御疑惑をお抱きになられた時に、佐久夜毘賣は、其の御疑念を晴す爲めに、土以て塗り塞ぎたる八尋殿に入りて御子を産み、給ひ、天孫をして其の八尋殿に火を放たしめ、其の火焰の眞只中に於いて、御子も御母親も共に安泰であらせられたが爲めに、佐久夜毘賣の御身の潔白は證され、御子は天孫によりて養育されたといふのであつて、自分はこれを、女子の貞操を神判するに、出産の時火を適用して判いた、古代慣習の反映してゐるものであると思つてゐたので、既に此の説を世に發表したことがある。⁽¹¹⁾

また垂仁天皇記の條に見える本牟智和氣命の物語では、天皇と皇后沙本毘賣との間に生れ給ふた

御子本牟智和氣命が、御母親の行爲が禍をなしてか、永く expiatory suffering の状態に置かれてゐるが、併し最初、本牟智和氣命が誕生なされた時、稻城を火焼く時しも、火中に生れましたので、本牟智和氣命と御命氣名されたのである。本牟智和氣御子は、品牟都和氣命ともまた譽津別とも書かれ此の御子の名に因んで置かれた品遅部などもあるが、御名の意の本、品、譽は何れも火の意味であり、牟智、牟都は大穴牟遲の牟遲と同義であるとするならば、此の大穴牟遲は三代實録及び延喜式などに大名持とあるに参照して、大名即ち名聲が天下に聞えたといふ意味でつけられた美稱であらうから、これによつて類推すれば本牟智和氣命もまた火中に生れ給ふたので火持和氣命といふ意に、火に關係せしめて命名されたのであらう。而して皇后沙本毘賣は、後に兄沙本比古王と共に、其の身を滅すといふ悲運に遭遇して居られるのである。此の物語に就いても、婦人の adultery の問題が取り扱はれてゐるのであり、生出御子が火中に生れてゐる點などから推して、佐久夜毘賣物語と同じく、火を適用した貞操神判の思想が其處に伏在してゐるといふ意見を自分は既に發表して置いたのであつた。⁽¹²⁾

扱て上に舉げた神々の誕生とか、生出とかに就いては、其の場合盟約とか神判とかの慣習が附きものになつてゐるが、また日本神話全體を通じて觀察しても、創世紀の頭初より、大八島國の創成をも、天地間に介在する神々の出生由來をも、山野草木をも、其他一切の萬象をも、皆神が産み給ふた

といふ物語になつて居るのを見ると、即ち此の産むといふ觀念から出發し、神代史に現はされてゐる物語を観る時は、古代日本人は、男女間の問題に就いては、頗る敏感であつたが爲め、結婚に際して結婚當事者は互に對者の行爲などに心を配つてゐたことは勿論であつたらうから、貞操神判などいふ風習があるのであり、其の結婚から延長された現象として、子供を得んとする呪術とか、或は子供の誕生時の儀式とかいふ風に、種々なる形態の儀式が存してゐたのであらうし、此の儀式、此の風習が、種々に姿を變へられ、更に神代史の作者の心理が加味され、興味主義の形を取つて、神代史中の處々に織り込まれてゐるのであらうと考へられる。それ故に神代史は、神代の歴史であるが、それによつて、古代日本國民の社會生活の有様を知ることが出来るのである。従つて男女間の adultery の行爲なども、社會生活上實際問題として、それを罪惡行爲として、憎むといふことなども、思想として存してゐたことが物語に反映してゐるのである。此の點は、男女個人同士の感情からも、社會風教上秩序を保持するといふ立場からも、國民の道德觀念の發展する道程からも、當然のことである。

而して、此の adultery の有無を確める爲めに、種々な方法が發達するに至るのである。天孫と佐久夜毘賣との物語に、火を適用して adultery の有無を test して居るのも、天神と素尊の物語に、生るゝ御子の男、女の別に依つて、行爲の善惡を判定してゐるのも、共に adultery の有無を確めんとし

て居る貞操神判の例と見ることが出来るのである。

斯くの如く觀察し、斯くの如く論及し來つて、茲に伊邪那美の女神が、火神迦具土神をお産みになられた時、美蕃登彗えて、遂に神避りましたといふ神代史の記載に、新たに直面する時、此の物語の中にも、火を以てする貞操神判の思想が反映して居ると考察することが出来ると思ふ。

伊邪那美の女神が、火神迦具土神を、未だ産み給はざる以前、伊邪那岐の男神と、天之御柱を行き廻りて御契を結び給ふた時に、最初に生れしたのは蛭兒であつた。此の蛭兒は葦船に入れて流し去てられたのであつたが、其時二神は、共に神議をこらし給ふた末、「今吾が生める子不良、猶天神の御所に白すべし」と、のたまひて、天神の命を請ひ給ふたのである。爾に天神は、古代日本に行はれたる占卜の一種なる布斗麻邇で卜相をなし、「女を言先だちに因りて不良、亦還り降りて改めて言へ」と、詔りたまふたと古事記に見えてゐる。

二神が、國土創成をなさんとして居る此の物語の一節を見ると、茲に不良の御子蛭兒の生れた原因を、女神伊邪那美神の「言先だちし」に歸して居られるのは注意すべきことである。

次ぎにまた二神は、國土大八島を生み成し、更に諸々の神々を生みなして居られるが、最後に、此處に取り扱つて來た、火神迦具土神を生み給ひて、美蕃登彗えて病み臥し、遂に神避り坐すに至るといふ不祥事が起つて居るのであつて、此の點にもまた留意しなければならぬ。

然るにまた別に、男神伊邪那岐命は、御佩せる十拳の劍を抜きて、其の御子迦具土神の頸を斬り給ふて居られるのである。御生出の御子が、斯くの如く斬られて居るといふことにもまた吾々は關心すべきである。

そこで、此の伊邪那美の女神が、火神を生みて、神避り給ふたといふ神話を、それが神話であり、上代の説話であり、物語であるといふ點から、全々切り離して、世間一般に見らるゝ、現實の問題である、出産時の状態より觀察するならば、先きに一寸一言して置いた如く、出産時の不慮の出來事として、母親は難産の結果、死亡する場合がよく存するので、誕生とか出産とかを屢々記載してある神話傳説にも、難産死亡といふことが社會生活の一現象であるとするれば、それが反映してゐるのであらうと、解釋される者もあるかも知れないが、併し迦具土神話の場合では、單に難産死亡の現象が表現されてゐるのでないと思はるゝのは、生れ出でた御子迦具土神が、男神伊邪那岐命の爲めに、特に頸を斬られてゐることである。普通一般人の難産の場合に、縦し母親は死亡したとしても、生れた子供に對しては、父親としての愛情の濃かなる點が見出さるべきである。況んや其の子供を斬殺するが如きことはないのである。而して此の場合には女神は特に美蕃登を彗かれて病み臥して居るので、他の神話に參照して解る如く誕生によく火といふ元素が齎されて居るのであるから、此の物語の中には、難産死亡などいふ事實の反映と見るよりは、更に別に深い意義が発見されなけ

ればならないやうに考へられる。

そこで自分は、前に邇々藝命が、佐久夜毘賣に對して、*adultery* の御疑惑を抱いた結果、毘賣は火神判をなして行爲の正しさを立證した物語を擧げたが、此の迦具土神話の場合も、最初に蛭兒生出の原因を女神の「言先だちし」行爲に歸して居る點などに參照して見ると、女神の行爲は積極的であると見られるので、佐久夜毘賣の出産時に、天孫が火を適用して、以て毘賣の行爲に、*adultery* の有無を發見せんとした思想と同一の思想があるのであり、其の時の産時の神話では、火を適用したといふ風に、火そのものは元素の火となつてゐるが、迦具土神誕生の神話では火神を生むと變形して居るのであらうと思ふ。そして、佐久夜毘賣の神話の時には、産室に火を放たれたが、併し其の火焰の中に包まれ乍ら、母子共に安泰であつたので、天孫は毘賣に對して抱いてゐた疑惑を放棄し、生出された御子を御養育されて居るのである。然るに迦具土神話では、女神は病み臥して、神避り給ひ、御子また父神に斬られてゐるといふ記載であるを見ると、母子共に安泰でなかつたことを示して居るのである。女神が火で傷害を蒙つたことは女神に對して疑念は益々深められ、從つて生れ給ふた御子は、父神によつて養育されるどころか、却つて斬り殺されるといふ結果になつたのである。換言すれば、未開民族間に、産時の風習として行はるゝ *father's recognition* が出来なかつたのであると思ふのである。

それ故に、木花之佐久夜毘賣の場合も、伊邪那美命の場合も、共に出産時に於いて行はるゝ貞操神判の一つである *father's recognition* といふ慣習の反映してゐる物語であつて、何れも火によつて母親の行爲を *test* してゐるものであると考へられる。たゞ佐久夜毘賣神話には、明瞭に母神に *adultery* の有無を疑つて居る文字が見えるし、迦具土神話には、斯る疑惑の言辭が明記されてゐないといふ記述上の差異は認められるが、併し前後の關係から、また物語全體の敘述の有様や、事の結果などより判定して、兩者には、同一な思想が反映して居り、共通な風習が取り入れられて居ると考察しても差し支へはないやうである。

併し神判の結果は、一方佐久夜毘賣神話では、毘賣の行爲が正善であつたことが確證され、他方迦具土神話では、女神伊邪那美命に、寧ろ非難さるべき點のあることが證據立てられたのであり、其處に善惡を判定するに、天神の嚴格さ、正確さを表示して居るが、やがてそれは、古代日本の社會に於いて、國民は善惡に對して正確であり嚴格である判定を要求してゐた思想の表はれであることが解るし、道德觀念の發達を理想としてゐる想念の現れを神話の形で物語つてゐることが分る。

之れを要するに、迦具土神話は、日本の古代社會に於いて、其の例に乏しくなかつた男女間の貞操問題 *adultery* の有無といふことに對して、之れを *test* するに火を適用する *ordeal* を行つてゐるといふことが一般的であつて、此の一般的の風習が、古代日本人の社會生活や、思想や觀念を書き遺

して來たものと稱せらるゝ唯一の古代文献なる記紀の中に、遇々迦具土神誕生の物語とか木花佐久夜毘賣神話として残つて居るものであると見られる。そして木花佐久夜毘賣神話に記してある例は、fine ordealの結果は、好結果であつて、母子共に安泰であつたのであるが、迦具土神話の例では、寧ろfine ordealの結果は悪結果であつて、母神は炙かれ、御子は父神に斬られた例であると觀すべきであらう。道德上、善と惡とを對立せしめて生活して居る社會生活の反映が物語として遺存して居るとしたならば、一方に善い結果の物語があれば、他方に惡い結果の物語があつても、別に不思議ではなす。

参 照

- (1) 古事記傳 卷五、二五三—二六九頁
- (2) 日本書紀通釋、卷四、一七一—二〇三頁
- (3) Frazer, Myths of the Origin of Fire p. 46, 220
- (4) 古事記傳、卷五、二七一頁
- (5) 同 上
- (6) 同 上
- (7) 同 上 卷五、二七三頁
- (8) 日本書紀通釋、卷四 一七四頁
- (9) 同 上 卷七 三一九—三三三頁

- (10) 史苑、卷四、一號、拙稿古代日本の神判に就いて参照
- (11) 東洋學報、卷一四、第二號、拙稿古代日本のオルデアールに就いて参照
- (12) 古事記傳、卷二四、一四八五頁 同上 卷九 五三五頁
- (13) 史苑、第三卷 五號、拙稿古代日本の神判に就いて参照